文化

頑張る若者 抱きしめたい

◇カンボジアのこどもに学校づくりの運動◇

小山内 美江子

カンボジアのこどもたちにかかわって五年が過ぎた。国境キャンプからの帰還難民の救援活動を続けるうち、学校も教師も不足したカンボジアには、まず教育が必要と感じたからだ。その担い手は学生で、今では世界のどこへでも、教育を必要とするこどもたちの所へ出かけて行く。

ものには予告が大切である。「抱いちゃうぞォ」と叫んで私は若ものを抱きしめた。ついでに音高く片方の頬（ほほ）にキスもやってのけた。予告された相手は身構えるヒマもない。だが「ハイ　お次！」と叫ばれた二番手はウヘッと思ったかも知れないけれど逃げなかった。

♥ ♥ ♥

帰って来た学生に感動

「よく帰って来た、よく頑張って来た！」。私は出来るだけ元気に叫んだつもりだが、そばにいた事務局のMさんが泣き出している。昨年の一月末のことだった。

カンボジアの学校づくりから帰国して一週間も経ずに、あの阪神大震災である。仲間の若ものはその当日から被災地に駆けつけ、この日帰って来た大学生は四日目の出発組だったが、卒業試験日ギリギリに戻ったのである。

奮闘して来た彼らが愛（いと）しかった。思ったことは形にしたほうがよい。「抱いちゃうぞォ」と照れをふきとばして、抱擁やキスが出来るのはボランティアの役得であろう。

実を言うとこれには一つの反省がある。一昨年、私たちの会はベテランの他団体と組んで旧ユーゴスラビアに学生を送った。JEN（ジャパン・エマジェンシーNGO）としての活動だが、西側東側にとらわれず人道的立場からクロアチアにもセルビア側にも救援活動を展開したのだが、第三陣はセルビアを通ってモンテネグロまで行った。むろんJENの現地責任者が国連や国際赤十字と密接な連絡をとっているので危険なことではない。

だがこの三陣は、当時セルビアが国連の制裁を受けていたので、ウィーンからルーマニアへ飛び、バスで国境を越えるという得難い体験をした。その中に海外旅行初めてという男女三人衆がいて、この三人だけがひと足先に帰国することになる。治安があまり良くないと言われているテミシュアラ空港を利用するのだ。

「三人寄れば文殊の知恵ってネ、来た通りの道を忠実にたどれば君たちも日本に帰れるはずだ」。聞きとりにくいベオグラードへの電話で叫んだものの、無事な姿を見るまでは居ても立ってもいられない。

早朝、成田に駆けつけ、私は税関を出てくる旅行者の群れに目をこらした。少し虚脱したような顔で出て来た三人は、私に気付くとパッと目を輝かせ「ただいま！」と叫び、胸がいっぱいになった私は、みそ汁付き特上トンカツ定食と隣のすしまでおごってしまう。

後日「あの時抱きつきたかった」と彼らに言われ、「私だって抱きしめたかったんだヨ」とこたえながら、お互いそんな遠慮があったら楽しい活動は出来ないぞと反省したのである。

♥ ♥ ♥

8カ所建設、2棟修理

大学生を活動の主力とする私たち「カンボジアのこどもに学校をつくる会」は、海外ボランティアの三大条件といわれる「語学力、専門技術、長期滞在」のどれも満たしてはいない。けれど、カンボジアに三年掛かりで八カ所に新校舎を建設し、破損校舎二棟を修理している。

また呼びかけに応じて各地から送ってくださった笛、けん盤ハーモニカなどを船で運び、これら楽器をはじめて見る教師たちに、プノンペン教育局と連絡をとりつつ、ドレミファから教える自前のプロジェクトもはじまった。ついこの前まで学生だった仲間が、現地駐在の音楽の先生となり、涙と笑いの報告を毎日ファクスで送ってくる。

こんな素敵なことを多くの人に知って頂くのが私の役割で、知人や母親団体や女性グループから学校建設費を預けていただけるようになった。我が会は、若ものが現地に出掛け、顔が見えないといわれている日本人の顔を見てもらい、汗を流して現地の人と仲良くなり、実体験がなく勉強だけだった学生に教育とは、豊かさとは何かを学んでもらうのが特色である。だが、特色にはお金がかかる。

私たちはまだ郵政省ボランティア貯金からの助成金が受けられないので、寄付のほかは、バザーで資金を集める。すべて学生たちの計画だ。今年は十一月にバザーを開き、その資金でカンボジアに出かける。

♥ ♥ ♥

「楽しく学ぶ」モットー

熱しやすく冷めやすい日本人というけれど、先輩から後輩へ、そして口コミで大学の枠を超えて活動が続いているのは心強い限りである。

「楽しく学ばずして何がボランティア！」が合言葉だ。電気が来ていない所では、前回にくぎも打てなかった学生が、大汗をかきながらジェネレーターをまわす。モーターがうなりをあげると手をたたいて喜んだ女子学生が問う。「これで何をするンですか？」。

私はあ然とその顔を見るが「へえー、これで電気が生まれるンだァ」と感動され、私も感動。学ぶということはすごいことなのだ。

ちなみにカンボジア以外に出て行く時の会の名前はJHP（ジャパン・チーム・オブ・ヤング・ヒューマンパワー）。そのOBの一人が、今も和平なろうとしているボスニアのゴラジュデに残り救援プロジェクトをすすめている。（おさない・みえこ＝シナリオ・ライター、カンボジアのこどもに学校をつくる会代表）